

令和 4 年 5 月 18 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02812

研究課題名(和文)対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究

研究課題名(英文)Creation of Teacher-training Curriculum whose Core is Dialogic Scenarios and Development of its Evaluation Methods

研究代表者

山田 康彦(YAMADA, Yasuhiko)

三重大学・教育学部・特任教授(教育担当)

研究者番号：30220411

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、対話的事例シナリオを核としたPBL教育のカリキュラム開発と、その評価方法の開発研究の2つを行った。研究成果は、次の諸点である。

1)10科目の教員養成PBL対話的事例シナリオカリキュラムを開発し、ベストミックスとしては、[少数事例シナリオ核型][複数事例シナリオ配置型][2種類PBL配置型]の3タイプが存在することを解明した。2)評価方法としては、コンセプトマップ評価の導入に成功し、学習者自身の自己評価、指導者側から見た学習者理解と学習到達度の評価、学習者の学習ツール、さらに学習者の学習実感の醸成という多様な意義があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

代表的な課題探求的学習法であるProblem or Project based Learning(PBL)は、教員養成教育の中に十分には取り入れられていない。特に、教室の中で可能な対話的事例シナリオを教材にしたPBLはほとんど開発されていない。しかしそれは、高度な実践的指導力の育成に重要な役割を果たす。その中で本研究の次の2つの成果は、教員養成教育及びPBL教育の発展への大きな貢献となる。1)10科目の教員養成PBL対話的事例シナリオカリキュラムを開発し、3種類のベストミックスのタイプを示した。2)評価方法として、ルーブリックに加え、コンセプトマップの導入に成功し、4つの意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文): Problem or project based learning(PBL) isn't leveraged in teacher training so much. But the interactive scenario education in PBL particularly plays an important role in that training. Because it advances students to cultivate practical abilities which connect educational theories to practices.

In this research we developed new curricula of 10 teacher training subjects, the cores of which were formed by the interactive scenarios. And we could show the three types of the most suitable curriculum. Besides we succeeded to introduce concept maps as the assessment method of PBL curricula. And we made its four significances clear. The assessment through the concept map has the significances that learners can assess themselves, that teachers can understand learners deeply and assess the degrees of achievements in their learning, that learners can use as the tools to learn, and that learners can feel the result of learning for real.

研究分野：教育学、芸術教育論

キーワード：PBL教育 教員養成教育 対話的事例シナリオ PBL教育評価 コンセプトマップ アクティブ・ラーニング 課題探求的学習

1. 研究開始当初の背景

PBL教育は、教育史上、知識・技能伝達型の受動的学習に対して、20世紀初頭からの学習者による能動的で実際的な学習を主張する新教育の流れに位置する。1960年代の後半から70年代の初めにかけて、欧米で医学教育を中心にProblem-based Learningが始まり、他方で工学教育を中心にProject-based Learningが開始された。1980年代以降、これらの2つの形態の教育はそれぞれ別々に広がっていったが、2000年代になると両形態の共通性に着目して展開する事例も生まれてきている。日本では、そうした海外の動向に触発されて、1990年代から医学教育及び工学教育を中心に導入され、2000年代には、取り組む大学が飛躍的に増加し、教養教育を含めて導入する幅が広がってきている。

PBL教育の関連論文のCiNiiの検索に基づくと、1970年代から総数で3341件、近年では2016年に112件、2017年に103件ヒットする。医学・工学以外の高等教育における様々な専門分野の教育方法として関心を持たれ始めていることがわかる。しかしながら論文のほぼすべてが、広い意味での実践報告（制度設計、カリキュラムプランニングや事例報告）となっている。医学系以外におけるPBL教育は、実践の計画や実施が先立ち、基盤となる理論（対話論、認識論）に欠け効果の実証性が薄いのが現状である。

PBL教育は、コンピテンシーをベースとするE2030(The OECD Learning Framework 2030)でもカリキュラムや単元のデザイン方法としてその中核に位置付けられており、これからますます効果を実証するエビデンスに基づくカリキュラムデザインが求められている。私たちは、科研費研究補助金（平成24年度～26年度、平成27年度～29年度基盤(C)）を受けた6年にわたる研究において、バフチン(Bakhtin, M.)の対話論に基づいた対話的事例シナリオを開発し、また同時に評価方法を開発することで、その教育効果を実証的に明らかにしてきた。対話をつくりだすことによる「観」（教育事象への見方・考え方）の自覚と相対化、さらに観の変容を目的とする事例シナリオの開発において、新しいフォーマット（事例の紹介、定説（よくありそうな対応）の提示、定説に対する批判、定説にかわる実践例の提示）を策定し、ループリックによる評価方法の確立によって、教員養成の多分野における事例シナリオ教育の質を高めてきた。

上述のように対話的事例シナリオは、「観」の自覚と相対化、変容をもたらすことに成功した。しかし、観の変容が一過性の到達点で終わってしまうことも課題として認識されるようになってきた。つまり授業科目の内容構成における確かな位置づけがなければ、持続的な効果や真の観の形成にはつながらないのである。

そこで本研究では、私たちが築き上げてきた到達点（対話的事例シナリオの原理の明確化と開発、またその評価方法の開発による質保証）を基盤にしながら、授業科目の内容構成を考究の対象とした。事例シナリオを核としながら1科目30時間の授業の内容構成をどのようにコーディネートするか検討し、具体的なモデルカリキュラムを開発するとともにカリキュラム評価を課題とした。

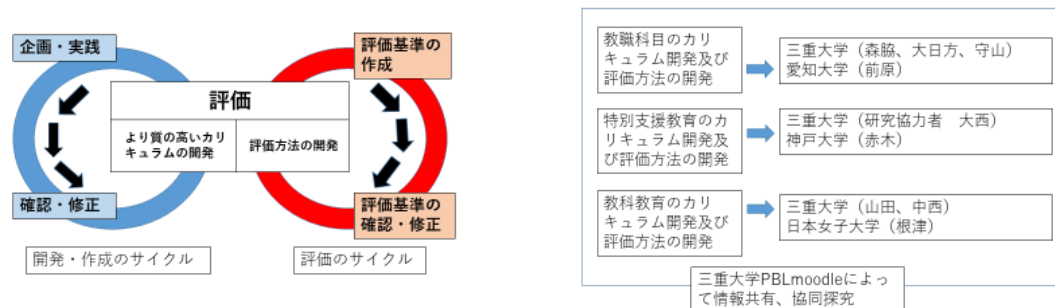
2. 研究の目的

上述の課題に示されているように、本研究の目的は、対話的事例シナリオを核としたPBL教育のカリキュラム開発、およびそのカリキュラムの評価方法の開発研究を行うことの2つである。

第1の目的は、対話的事例シナリオを用いたPBL教育を核とした教員養成授業科目のベストミックス（専門的知識・技能の形成、現場体験と理論の往還等を含めた最適カリキュラム）を創り

出し、個々の授業科目の目的・目標との整合性をはかることである。対話的事例シナリオを用いた PBL 教育は、教育実践の特性を踏まえた、①状況との対話を通しての、②事象の中の問題の所在の発見と「観」（教育事象への見方・考え方）の自覚・相対化を目的としており、教員養成科目の核として位置付けることができる。これまでの科学研究で開発してきた対話的事例シナリオを基礎に、さらに多くのシナリオを開発すると同時に、それらを一授業科目のカリキュラム（内容構成）の核として配置した最適カリキュラム（ベストミックス）を開発することである。第2の目的は、カリキュラムの評価方法としてコンセプトマップを導入し、検証のツールとして一層の洗練化をはかりつつ、授業科目の評価、検証サイクルを確立することである。コンセプトマップは1970年代にノヴァック(Novak, J.D)らを中心に開発された評価方法で、中心テーマをめぐるコンセプト間のつながりを階層的なネットワークで図示したものである。我が国では、初等中等教育段階における科学教育を中心に取り入れられ、学習者の理解の内的な把握が可能な方法として、また定量的評価と定性的評価の両方が可能な評価方法として定着してきている。本研究では、コンセプトマップを用いて授業開始直後と終了における学習者の認識の深まりを可視化し、カリキュラムの改善に用いるという、コンセプトマップのカリキュラム評価の特性に即した活用方法を開発する。

3. 研究の方法



本研究の研究方法は、授業を場とした実践的研究と、そうした実践結果を理論的にまとめる理論的研究の2つの側面に分かれる。

実践的研究は、上記の左図に示されているように、1)教材とカリキュラムの開発・作成と授業における実施と、2) 評価方法・基準の開発と実施の2つからなっている。

- 1) 教材とカリキュラムの開発・作成と実施として、具体的には対話的事例シナリオのさらなる開発、および授業科目における対話的事例シナリオを核としたカリキュラム開発を行った。研究代表者と研究分担者9名及び研究協力者3名の12名で研究グループを作り、上記の右図に示したように、教職科目、特別支援教育、及び教科等の専門教育科目の対話的事例シナリオ教育カリキュラムの開発と授業実施を進めた。
- 2) 評価方法・基準の開発と実施については、コンセプトマップの実験的導入とその授業評価ツールとしての有用性の検証を行った。具体的には1)で開発したカリキュラムから成る諸科目の授業で、主に初回と最終回に受講生がコンセプトマップを記入し、その結果を自ら振り返る活動を行った。

理論的研究は、上記1)2)の結果を理論的にまとめ、その成果と課題を明確にする作業を進めた。

1)に関しては、①該当授業のカリキュラムの目的・構成と導入された対話的事例シナリオとの関係の検討、②コンセプトマップ等の評価結果をふまえた該当カリキュラムと対話的事例シナリオの有効性の検討、③①②の結果をふまえたベストミックス（最適カリキュラム）のモデル化

と探求を行った。

2)に関しては、コンセプトマップの開発時点での理論、過去の実施状況、そしてその理論化の現段階を整理するとともに、本研究で導入した結果を分析し、本研究での特徴を明らかにする作業を行った。

さらに1)と2)の結果を総合させ、教育効果の核心となる「観」の自覚と相対化、変容と対話的事例シナリオ教育カリキュラムとの関係について理論的に深化させる研究を進めた。

4. 研究成果

第1の研究目的である対話的事例シナリオを核としたPBL教育のカリキュラム開発については、以下のような成果を上げることができた。

- (1) 研究代表者・分担者・協力者が所属する4大学1高等学校で、教職教育科目及び専門教育科目を合わせて10科目のPBL対話的事例シナリオ教育カリキュラムを開発し実施することができた。
- (2) 対話的事例シナリオを核としたベストミックス（最適カリキュラム）のモデル化をはかり、4大学において追試、検証を行うことができた。その成果をふまえ、ベストミックスとしては、[少数事例シナリオ核型] [複数事例シナリオ配置型] [2種類PBL配置型]の3タイプが存在することを解明した。

第2の研究目的である評価方法の開発については、以下のような成果を上げることができた。

- (3) 評価方法としてループリック評価の意義を再確認するとともに、コンセプトマップを導入し、授業評価の検証ツールとしての有効性を確認することができた。
- (4) コンセプトマップについて①学習者自身の自己評価、②指導者側から見た学習者理解と学習到達度の評価、③学習者の学習ツール、さらに④学習者の学習実感の醸成という多様な意義があることを明らかにすることができた。
- (5) さらに、(1)~(4)の成果をふまえ、「教育観、授業観、児童・生徒観などの多様な観の集合体」である「観」の歴史的及び理論的性格を解明し、対話的事例シナリオ教育カリキュラムがそうした「観」を育成する重要な役割を果たすことも明らかにした。

以上の研究成果については、山田康彦・森脇健夫・根津知佳子・赤木和重・中西康雅・大日方真史・守山紗弥加・前原裕樹・大西宏明・角谷道生・楊欣（2022）『対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究（令和元年度-令和3年度科学研究費助成事業研究成果報告書）』（三恵社）にまとめることができた。

本報告書の構成は、以下のようになっている。

I 研究経過と到達点 [森脇健夫]

II PBL対話的事例シナリオ教育カリキュラムと評価の事例集

1. 教職教育科目

1-1 教職入門 [守山紗弥加]

1-2 教育方法論 [前原裕樹]

1-3 教育内容・方法論 [楊 欣]

1-4 特別活動論 [大日方真史]

〈トピック・事例シナリオの種〉特別支援教育入門 [大西宏明]

2. 教科専門科目・教科教育法科目

2-1 工業数学 [中西康雅]

2-2 図工教材研究 [山田康彦]

3. 専門教育科目

- 3-1 「先端児童学序説」「児童学総論」[根津知佳子]
- 3-2 発達障害と共生社会 [赤木和重]
- 3-3 介護過程（高等学校教科「福祉」）[角谷道生]

III 理論編

- 1. PBL対話的事例シナリオ教育カリキュラムの構成と特徴 [山田康彦]
- 2. PBL教育から見たコンセプトマップの活用法と意義
 - 2-1 学生の学びの実感に見るコンセプトマップの活用法と意義 [大日方真史]
 - 2-2 2つの方法を通して見たコンセプトマップの活用法と意義 [角谷道生]
- 3. PBL対話的事例シナリオ教育カリキュラムの評価のあり方
 - 3-1 PBL対話的事例シナリオ教育の授業と評価の構造 [根津知佳子]
 - 3-2 PBL対話的事例シナリオ教育カリキュラムの3つの側面と開発された評価方法の成果と課題 [守山紗弥加]
- 4. 観の変容とPBL対話的事例シナリオ教育の役割 [前原裕樹]
- 5. 近年のPBL教育をめぐる理論と実施状況
 - 5-1 初等・中等教育におけるPBL教育 [赤木和重]
 - 5-2 STEM教育とPBL [中西康雅]

その他、研究成果として、雑誌論文31編、図書8編がある。さらに研究成果の発表として8つの学会発表を行った。そして2022年の以下の学会発表では、第3者による研究成果の検証作業も行うことができた。

第28回大学教育研究フォーラム、2022年3月17日開催

「参加者企画セッション」PBL対話的事例シナリオ教育のカリキュラムと評価方法の開発

司 会：大日方真史（三重大学教育学部）

報 告：山田康彦（三重大学教育学部）・角谷道生（三重県立明野高等学校）・守山紗弥加（三重大学教養教育院）前原裕樹（三重大学大学院教育学研究科）

指定討論：伊藤通子（東京都市大学教育開発機構）・吉永紀子（同志社女子大学現代社会学部）

以上のように、本研究は研究計画に沿って、研究目的を十分に達成する成果を上げることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計31件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 18件）

1. 著者名 森脇健夫	4. 巻 第72巻
2. 論文標題 授業におけるふりかえりの実践的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 383-397
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 前原裕樹	4. 巻 第3号
2. 論文標題 コンセプトマップを活用したカリキュラム・マネジメントに関する一考察 - 概念のリンク本数に焦点をあてて -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三重大学教職大学院論集	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森脇健夫	4. 巻 495
2. 論文標題 「新しい日常生活」で育つ非認知能力（“grit” 「やり抜く力」）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈良女子大学附属小学校『学習研究』	6. 最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森脇健夫	4. 巻 第3号
2. 論文標題 地域の教育課題解決演習の4年間	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三重大学教職大学院論集	6. 最初と最後の頁 93-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川大貴・松本金矢・中西康雅・守山紗弥加	4. 巻 第27号
2. 論文標題 探究的な学びを支えるカリキュラム開発・分析支援ツールの提案	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三重大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 45-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 角谷道生・大日方真史	4. 巻 第72巻
2. 論文標題 高校教科福祉における他校生とのピア・ラーニングの効果検証	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 361-368
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 角谷道生	4. 巻 第9号
2. 論文標題 高校教科福祉における対話的事例シナリオを用いた授業の効果と検証	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間教育と福祉	6. 最初と最後の頁 98-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大日方真史	4. 巻 第898号
2. 論文標題 「一人である」ことと交流・共有と 大学の遠隔授業における試みと発見	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 67-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 根津知佳子・吉澤一弥・角藤比呂志・和田直人	4. 巻 vol.51 No.2
2. 論文標題 ウィリアムズ症候群の視空間認知とパフォーマンス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本芸術療法学会誌	6. 最初と最後の頁 52-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 根津知佳子・吉澤一弥	4. 巻 第49巻
2. 論文標題 音楽療法における即興技法 “ 覚識の連続体 ” に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本音楽心理学音楽療法研究年報	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 根津知佳子・川見夕貴・和田朝美	4. 巻 第68号
2. 論文標題 音楽療法的アプローチの可能性と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本女子大学家政学部紀要	6. 最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 守山紗弥加・杉澤学・松本金矢	4. 巻 11
2. 論文標題 学級生活を捉える感性 - 雰囲気との対話が意味するもの -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 感性哲学	6. 最初と最後の頁 21-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田康彦	4. 巻 No.87
2. 論文標題 思春期・青年期の美術教育実践と理論の展開とその意義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 子どもと美術	6. 最初と最後の頁 2-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田康彦	4. 巻 105号
2. 論文標題 コロナ禍に向き合う芸術文化の取り組みと美術教育の展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術の教室	6. 最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森脇健夫	4. 巻 第71巻
2. 論文標題 教員養成型PBL教育のカリキュラム開発ーリフレクションツールとしてのコンセプトマップを用いてー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 339-346
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 角谷道生・森脇健夫	4. 巻 第71巻
2. 論文標題 高校教科福祉におけるピア・レビューを用いた動画を含む「授業」づくりの効果と検証	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 523-531
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森脇 健夫	4. 巻 1号
2. 論文標題 めあて・ふりかえりの質の向上から主体的・対話的で深い学びへ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 伊勢市教育委員会 令和元年度 事業報告書	6. 最初と最後の頁 42-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田康彦	4. 巻 第26号
2. 論文標題 アクティブ・ラーニング及びPBL教育の検討すべき論点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 三重大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 23-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 根津知佳子・川見夕貴・日下瑠子	4. 巻 第26号
2. 論文標題 鑑賞活動におけるパフォーマンス評価の開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本女子大学大学院家政学研究科・人間生活学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 235-242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 根津知佳子・川見夕貴・高橋順子・井上千本	4. 巻 第67号
2. 論文標題 幼年期の音楽的経験に関する研究～合奏支援を中心に～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本女子大学家政学部紀要	6. 最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川見夕貴・根津知佳子・和田朝美	4. 巻 第67号
2. 論文標題 舞台空間における音楽表現の保障に関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本女子大学家政学部紀要	6. 最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 根津知佳子	4. 巻 第4号
2. 論文標題 "声を出すこと"による学び	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 活動理論研究	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 赤木和重・大塚真由子	4. 巻 第25巻第1号
2. 論文標題 特別支援学校教員を対象とした個別の指導計画に関する意識調査：作成上の悩みや困難に焦点をあてて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SNEジャーナル	6. 最初と最後の頁 162-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本金矢・守山紗弥加・中西康雅	4. 巻 第61巻 第1号
2. 論文標題 技術科教員養成における教材開発のためのPBL教育モデルの提案と実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本産業技術教育学会誌	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森脇健夫	4. 巻 第71巻
2. 論文標題 教師の「観」の発達と教育実践の変容 4名の教師の授業参観及びライフヒストリーインタビューより	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 431-438
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 赤木和重	4. 巻 806号
2. 論文標題 即興の視点から考える発達障害のある子どもたちの学び	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 指導と評価	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大日方真史	4. 巻 第73巻
2. 論文標題 教職科目の授業におけるコンセプトマップの意義 - 特別活動に関する学生の学習実感に着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要（教育実践）	6. 最初と最後の頁 425-435
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 角谷道生・森脇健夫	4. 巻 第73巻
2. 論文標題 対話的事例シナリオ実践（高校教科福祉）における生徒の内面的変容過程の検証	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要（教育実践）	6. 最初と最後の頁 553-559
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森脇健夫	4. 巻 第4号
2. 論文標題 実践知と技術知の架橋をめざして	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三重大学教職大学院論集	6. 最初と最後の頁 107-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前原裕樹	4. 巻 第4号
2. 論文標題 「観」の変容を促す実践研究の概観 - 教員養成課程における対話的カリキュラムの開発に向けて -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三重大学教職大学院論集	6. 最初と最後の頁 67-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根津知佳子	4. 巻 第69号
2. 論文標題 創造的音楽活動における表現と生活世界の往還	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本女子大学紀要 家政学部	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山田康彦・大日方真史・角谷道生・守山紗弥加・前原裕樹・伊藤通子・吉永紀子
2. 発表標題 PBL対話的事例シナリオ教育のカリキュラムと評価方法の開発
3. 学会等名 第28回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 康鳳麗・森脇健夫
2. 発表標題 学習者オートノミーを育てる「ふりかえり」の実践的研究
3. 学会等名 中国語教育学会第19回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田康彦・中西康雅・森脇健夫・大日方真史・前原裕樹・根津知佳子・守山紗弥加
2. 発表標題 コンセプトマップを活用した教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発 対話的事例シナリオを核としてー
3. 学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根津知佳子
2. 発表標題 ウィリアムズ症候群の視空間認知とパフォーマンス
3. 学会等名 第51回日本芸術療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 根津知佳子
2. 発表標題 『星めぐりのうた』における音楽的経験～宮澤賢治と丸山亜季の楽曲比較を中心に～
3. 学会等名 活動理論学会秋季研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 守山紗弥加
2. 発表標題 学級生活を捉える感性 - 雰囲気の研究を通して -
3. 学会等名 第21回日本感性工学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本金矢・中西康雅・守山紗弥加
2. 発表標題 技術科教員養成でのものづくり体験における学び - 設計・製作のプロセスを通して -
3. 学会等名 第37回日本産業技術教育学会東海支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 守山紗弥加
2. 発表標題 学びの基盤づくりを目指すPBL教育による初年次必修科目
3. 学会等名 学び教育フォーラム「地域の課題を活用した協同的な学び・PBL・アクティブラーニングの実践」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 山田康彦・森脇健夫・根津知佳子・赤木和重・中西康雅・大日方真史・守山紗弥加・前原裕樹・大西宏明・角谷道生・楊欣	4. 発行年 2022年
2. 出版社 三恵社	5. 総ページ数 153
3. 書名 対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究（令和元年度-令和3年度科学研究費助成事業研究成果報告書）	

1. 著者名 赤木和重、DVD監督 / 富田直樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひとなる書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 DVD付特別版アメリカの教室に入ってみた	

1. 著者名 赤木和重・石井英真他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 320
3. 書名 流行に踊る日本の教育	

1. 著者名 赤木和重、宇野宏幸、一般社団法人日本LD学会第29回大会実行委員会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 156
3. 書名 学びをめぐる多様性と授業・学校づくり	

1. 著者名 根津知佳子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 248
3. 書名 音楽教育研究ハンドブック	

1. 著者名 根津知佳子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 一藝社	5. 総ページ数 148
3. 書名 子どもの理解と援助	

1. 著者名 赤木和重	4. 発行年 2019年
2. 出版社 クリエイツかもがわ	5. 総ページ数 136
3. 書名 自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価2	

1. 著者名 赤木和重	4. 発行年 2019年
2. 出版社 世織書房	5. 総ページ数 484
3. 書名 教育学年報11：教育研究の新章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森脇 健夫 (MORIWAKI Takeo) (20174469)	三重大学・教育学部・教授 (14101)	
研究分担者	根津 知佳子 (NEZU Chikako) (40335112)	日本女子大学・家政学部・教授 (32670)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	赤木 和重 (AKAGI Kazusige) (70402675)	神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	中西 康雅 (NAKANISHI Yasumasa) (00378283)	三重大学・教育学部・准教授 (14101)	
研究分担者	大日方 真史 (OBINATA Masafumi) (00712613)	三重大学・教育学部・准教授 (14101)	
研究分担者	守山 紗弥加 (MORIYAMA Sayaka) (50701439)	三重大学・教養教育院・特任講師（教育担当） (14101)	
研究分担者	前原 裕樹 (MAEBARA Yuki) (00755902)	三重大学・教育学部・准教授 (14101)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大西 宏明 (ONISI Hiroaki)	三重大学教育学部附属特別支援学校・教諭	
研究協力者	角谷 道生 (KAKUTANI Michio)	三重県立明野高等学校・教諭	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	楊 欣 (YANG Xin)	三重大学教育学部・非常勤講師	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関